

故・房野君への思い

ガネフォ水球

酒井哲也

(日本大学出身)

昭和34年(1959年)4月、房野君と私は日本大学の水泳部に入部しました。房野君は、京都・山城高校の出身でポジションは、ゴールキーパーでした。私は、東京・城北高校の出身でポジションは、フォワードでした。それぞれ期待に胸をふくらませ、夢を叶えるため練習に励みました。

当時は日本大学の全盛時代であり、4年生にはガネフォへ行った内田さん・村川さんが居られ、強いチームのお蔭で私は日本選手権水球競技大会の金メダルを3個も持っています。

でも最近、日本大学は2部に降格となり淋しい限りです。

私が大学2年生の頃、私は故郷が長崎の為、帰崎する時に京都で下車し房野君の家に一泊お世話になりました。その時、彼のお姉さんに美味しい料理等をいろいろご馳走になりました。そこで、彼とお姉さんの仲の良い事には参りました。姉・弟とはこんなに良いものかと思いました。まるで恋人みたいでしたよ。房野君も結婚するならお姉さんみたいな人になりたいと言っていました。

彼はいたってまじめで頑張り屋です。日本大学のキーパーには1年上に猪口さんと言う上手なキーパーが居て、試合に出る機会が少なかつ

たのですが、我慢強く練習を重ねて3年生ぐらいからぐんぐん上達して来ました。その結果ユニバーシアード(国際学生スポーツ大会)のブルガリア大会の日本代表選手として選出されたのです。その時、彼の喜びは半端でなく、両手を上げて私に抱き着いてきました。その一方で私が代表選手から落ちた事をどうとらえていたのかな? 私は成城大学の桑原重治君(東京・メキシコの両オリンピックに出場)と代表を争っていたのですから。

ユニバーシアードから帰って来た彼は、急に変わったように前向きになり、行動するようになりました。4年生でキャプテンになった彼は、インカレの一番大事な試合に向けて色紙を書いて部員に示しました。普通は「必勝」と書くところを彼は「勝つ」と書いたのです。何と力強く気迫がこもっていました。「今年はこれで行くぞ」とチームをまとめ「カツ」を入れたのです。

忘れられない試合があります。

それは、昭和37年の全日本選手権水球競技大会の決勝戦です。場所は成城大学のプールで行われ、私達(内田・村川・房野・酒井)は、桜泳会(日本大学の現役・OBの混合チーム)で出場、既に決定していたローマオリンピック選手との試合で、そのオリンピックチームを破ったのです。感動でした。今でも忘れることは出来ません。翌日のスポーツ新聞に載り、桜泳会を代表チームとして変えるべきとの騒ぎもありました。

ガネフォ(新興国スポーツ大会)の選手村では、房野君と同部屋で

したので、二人で選手村近辺を「ガネフォはガサブンカルノ、ガネフォはガサブンカルノ」と歌いながら歩いていました。その時、私は散髪屋に入りましたが、彼は子供連れの親子にサインしたり、話しこんだりしていました。その後、その親子から夕食に誘われたと言って、私一人を置いて房野君は出掛けて行きました。

また、ある時は、彼が居ない時に部屋に電話がかかって来て、女の声で「フサノ、フサノ」と言っているのです。要するに自分は、房野のファンだからフサノに変われと言っているのです。彼は外国の女性にもてる男だと思いましたね。

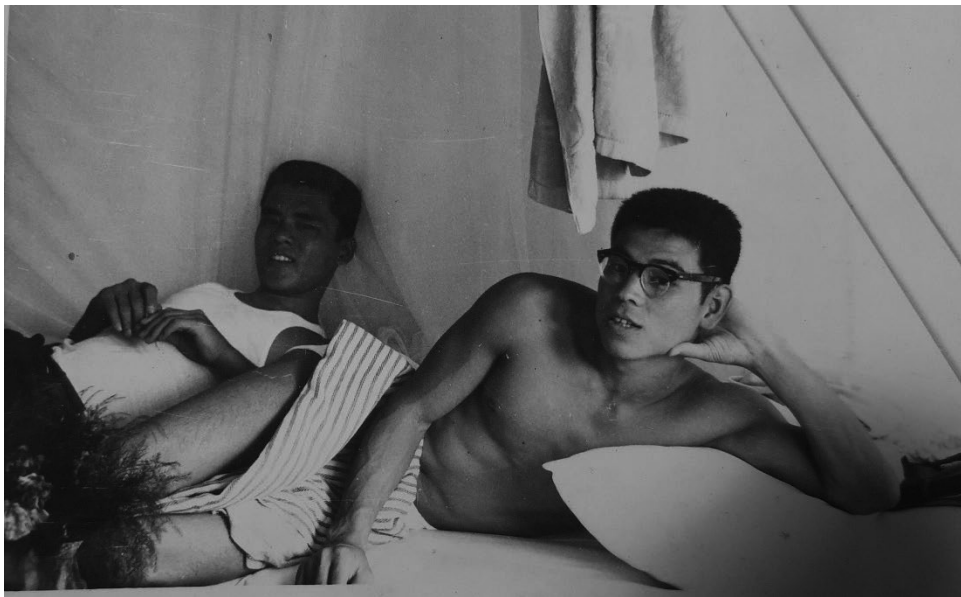
彼は学生の頃から常に外国に行きたいと言っていましたから、スペインに居ると聞いた時はなるほどと思いました。そして、彼の事ですから周りの住民にすぐ溶け込んだと思いますし、地区のいろいろな行事に積極的に参加して、信頼されていた事と思います。

彼は誰にでも愛された男です。何よりも素晴らしい愛妻と可愛い娘さんに恵まれ、昔からの念願だった夢を叶えました。

それなのにあの憎らしいコロナさえ無ければ・・・と残念でなりません。でも、我々も遅かれ早かれそちらへ行く事になります。その時は、菅久さん、浜野さん、田中さん等を交えて昔話を語ろうと思います。



選手村にて(左が房野、右が私)



宿舍のベッドにて(後ろが房野、前が私)